

すず 鈴 き 木 みち 道 お 男 (宮城県)

学位の種類 博士(国際文化)

学位記番号 国第6号

学位授与年月日 平成20年2月20日

学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

最終学歴 昭和60年3月

東北大学大学院文学研究科

博士課程前期2年の課程 修了

学位論文題目 堀田正敦の鳥学研究

—『観文禽譜』の博物学・分類学及び歌学上の評価と史料的价值について—

論文審査委員 (主査)

教授 高橋 禮二郎

教授 平川 新

教授 佐藤 勢紀子

教授 永広 昌之 (総合学術博物館)

論文内容の要旨

松平定信によって若年寄に起用され、改革派諸侯の一人として43年もの間その役職を務めた堀田正敦(1755-1832)は、『観文禽譜』(1794年序、完成は1831年)をはじめ『観文獣譜』、『観文介譜』などの博物書を残した。なかでも『観文禽譜』は、西洋動物学のわが国への本格的紹介を目前に控えていた江戸後期にあって、『本草綱目』に源を発する江戸時代の本草学的博物学の系譜に連なる鳥類図鑑としては、最大規模のものである。

単に扱っている鳥の種数と、著者本人の知見に基づく生物学的記載の量において最大であるに止まらない。収録各鳥に関して、記紀万葉集をはじめ漢籍を含む古典を可能な限り引用・掲載し、また、先学の言を批判的に引用しつつ本草学、すなわち薬学的効用に触れ、さらにこの時代ではやはり最大規模の、極めて正確な彩色図譜をも付し、包括的に鳥を扱った点で、まさに鳥のエンサイクロペディアである。分類学的記載文の正確さにおいても、本書は日本の鳥相(avifauna)と各鳥の個体群の変遷を探る資料として今日もなお有効である。当時の西欧の記載文及び図譜と比較しても、

『観文禽譜』は十分に比肩しうる。本書が世界で最初に生物学的記載を与えた鳥種も少なくない。生物学的資料としては、例えば絶滅したとされる世界的な希少鳥カンムリツクシガモは、本書収録の複数の図譜があって初めて種として広く認知されるに至った。また、ガン類のように、今日と江戸後期とでは国内の越冬状況が異なっている鳥もあることを教える殆ど唯一の文献も本書である。本書が、当時の他の文献と合わせて組織的に、かつ科学的な批判を経た上で利用されたならば、我が国の鳥学研究に寄与する宝庫となる。日本の鳥を知る上で、本書は必ず参照すべき文献である。わが国の本草学的鳥学の集大成が本書内に存するのであり、本書から江戸期の鳥学、即ち西洋動物学導入以前の日本鳥学の概要を知ることができるのである。江戸博物学の水準を示すものとして、貝類研究における『目八譜』に匹敵する内容を備えると言っても過言ではない。ちなみに純粋な「記載の学」としての博物学は、欧米以外では江戸時代の日本でのみ発達したといわれる。なお、鳥学とは鳥に対するあらゆる学的アプローチの総称である。それに対して鳥類学という場合、そのうちの生物学的アプローチに限定して用いる。

幸い筆者は、『観文禽譜』の諸本をもとに、図譜部に付された記述文を翻刻と現代語訳によって再構築し、また失われた図譜を同時代の図譜から可能な限り同一原図の敷写しと思われるものを用いて補い、それに詳細な解説を施して『江戸鳥類大図鑑』(2006)として出版する機会を得た。本論文では、図をはじめ、『観文禽譜』から直接引用・掲載できる原文に物理的制約があるので、事実上『江戸鳥類大図鑑』を資料編とし、本論文自体と一体のものとして頻繁に参照する。

『観文禽譜』研究の意義と本論文の目的・内容

本論文を要約するにあたって、まず『観文禽譜』の輪郭を素描し、本論文を中核とする研究が必要とせざるを得ない極めて広い視野を明らかにし、かつ、この研究の射程を明確にするために、研究史を踏まえた、『観文禽譜』および堀田正敦に対する研究の意義を整理した上で、本論文の目的を示すと共に、この江戸時代の一鳥類図譜の持つ文化的意味の大きさを改めて提示する。

1. 『観文禽譜』は江戸の本草学的鳥学の集大成と看做すことができ、本書の分析から明治前日本鳥学の到達点が確認できる。本書の科学史的価値の発掘が最初に行われるべきだが、そのためにはリンネに始まり、正敦の時代に急速な進歩を遂げていた西洋博物学の成果と比較する必要がある。また、正敦が膨大な量の本草書を、経験に照らして批判的に引用・掲載していることから、逆に、江戸博物学の通時的な展開及び進もうとしていた方向を探る手がかりを得ることができる。

2. 本書の引用文献とその引用法に注意すると、当時の博物学研究の様相を垣間見ることができる。特に諸大名がかかる研究に関与していたことは夙に指摘されてはいるが、この分野の研究および包括的整理には殆ど着手されていない。その手懸りとなる最大の史料として本書は重要である。

3. 本書が引用する漢籍は、本草関係以外の古典を広く含み、和書についても主要な博物学書・古

典に目が行き届いている。1. に述べたように、引用書は博物学史上興味深い、大量に掲載された古典は、正敦が当時の和歌界に深く関与していることもあって、文学史上見逃せない。さらに、地方名・ジャルゴン・漢名を含む膨大な鳥名の収集は、方言研究の上でも決して無視できない。

4. 本書の禽譜は、毛筆による精密な彩色の細密画を折本および卷子本に貼付し、その傍らに解説を付している。この絵は同じ原図を敷き写しの方法によって複製している。筆致等から、担当絵師は複数と思われるが、こうしたことは絵師の組織的工房がなければ行い難い。絵は同じでも、それを張り付けた折本は東京博物館と宮城県図書館のものでは全く異なっており、絵師と製本者は別であったことも窺え、大掛かりな分業体制の存在も示唆される。そして正敦が模写させた絵の中には、諸大名のほかに狩野何某蔵図とあるものも少なくなく、当時の御用絵師集団狩野家の工房が禽譜作成に関与したと推定するむきもある。絵師（集団）の確定は日本博物学史上も重要である。

5. 『観文禽譜』は、若年寄たる正敦によって多数の学者を動員した上で制作されている。その人的背景を検討することによって、幕府中枢すなわち改革派諸侯、端的には定信と、その老中退休後の築地下屋敷「浴恩園」を舞台とする学芸サロンなどを基点とする学問研究の様相が解明できる。正敦は浴恩園のメンバーを核として『寛政重修緒家譜』などの幕府による大規模編纂物の編集を直接指揮しており、そのノウハウを『観文禽譜』作成にも生かし、のみならず『観文獣譜』、『観文介譜』など複数の博物書にも手を染めた。正敦は自ら我が国の総合的な博物学体系を構築しようとしたとみられるのだが、それを確実に示す証拠はまだない。しかし『観文禽譜』などを手懸りに、その状況証拠を集めることはできる。正敦が目指したものを推測することは、1. に挙げた事項とともに、江戸博物学が最終的に向かった方向を明らかにする上で重要なヒントとなる。

6. 江戸文化が爛熟した化政期にあって、文化のさまざまな諸相のうち、正敦はとくに学問の分野をリードした。ところが、この時代の様相のうち、文化行政以外にも、正敦が深く関与した蝦夷地問題に関して、『観文禽譜』は多くを語っている。これのみならず、『観文禽譜』は化政期を新しい視点から俯瞰するための材料を多数提供している。

7. 最後に最も重要と思われるのは、本書の記載を、様々な方面の学史の中に正しく定位した上で再度精密に分析し、鳥相の変異を記載する歴史的・通時的生態学の資料として使用できるよう、また文学史・文化上の意味をも確認しつつ整理する作業である。これは日本を含む東アジアの動物及び環境の生活誌の変遷を探るため、また、鳥の文化史を探るために最良の情報を提供することになる。江戸鳥学に関する資料全体に、科学的分析を加えた上で同様の措置をとるべきは当然だが、本書の優れた鳥の記載は、消失資料の発掘が進められ、近年集成された丹羽正伯の『諸国産物帳』に匹敵する価値がある。特に仙台を中心とする関東以北や蝦夷地の、18-19世紀の鳥相を知るためには正敦自身などの観察事例の分析が不可欠であるし、この時代に諸国から輸入されていた鳥の最も詳しい解説書も本書である。この全貌はぜひ解明される必要がある。

本論文は、1.～7.の全体に亘って論じ、結論を得ることを目的とする。ただし2.の点は『江戸鳥類大図鑑』ですでに各論的に触れており、3.の点の内、漢籍と『観文禽譜』ないしは江戸の本草学的博物学との関係についてはそれ自体極めて大きなテーマであって、本論では多くは触れていない。また4.に関しては、既存の資料では分析が難しく、本論文では殆ど解明ができていないことを予めお断りする。以下に本論文の章立てを記し、内容を紹介する。全体は6章構成である。

第1章 序論

第2章 堀田摂津守正敦とその広範にわたる業績について

第3章 鳥類図鑑としての『観文禽譜』

第4章 堀田正敦周辺の文芸と学术研究の様相

第5章 『観文禽譜』を通してみる化政期

第6章 総論 — 正敦の博物研究とその時代

さらに、巻末には付表1～9（1 堀田正敦年譜、2 堀田正敦著作・編纂物一覧、3 『観文禽譜』（仙台北）収録全882項目一覧、4 『観文禽譜』収録鳥類目録、5 『観文禽譜』収録日本鳥類の科ごとの構成、6 『観文禽譜』に収録されていない日本国産鳥の科・属・種、7 『観文禽譜』和歌収録項目一覧、8 引用和歌収録文献一覧、9 『観文禽譜』と『続得利発看世』における異邦禽記述の対応部分）及び付属資料1～3（1 『観文禽譜』の正敦自身とその周辺に関する情報抄、2 『観文禽譜』の蝦夷地関係情報抄、3 『観文禽譜』のオランダ関係情報抄）を付している。これらが、本論文本文とは独立した資料としても大きな意味を持っているのが本論文の特徴である。

上述のように、本論文の大きな目的のひとつは、『観文禽譜』の科学的な側面を鳥学史の中に正確に定位すること、すなわち現代鳥類学の立場から『観文禽譜』の価値を検討し、現代動物学の母胎としての博物学の発展史における位置づけを試みることである。本論ではこれを行って第3章で行ったが、その前提となる基礎的な作業は『江戸鳥類大図鑑』において済ませてある。すなわち、わが国の近代生物学発足以前において最も浩瀚かつ網羅的なこの鳥類図鑑を、現代鳥類学研究の資料として様々な方面から利用できるよう、『観文禽譜』の収録鳥について種ごとに近代分類学の立場から検討・同定し、一覧表とし、鳥類学的トピックスを拾って、インデックスを付与する作業である。後に他の鳥類図譜にも同様の処置を行って明治前日本鳥学の全文献に拡大し、データベースを構築することは非常に有意義であるが、これは容易には達成できない。そうであるからこそ、まず江戸時代において最も完備している『観文禽譜』をもとに、我が国の本草学的博物学における鳥学の水準を博物学及び分類学の歴史に照らして評価することは、現代の鳥類学および鳥学研究に寄与するための包括的な明治前日本鳥学研究の予備作業の一環として不可欠なのである。

『観文禽譜』の分析はしかし、鳥学の分野以外に、当時の幕閣とその情報網、定信周辺の学問研

究の様相、北方政策等に対しても新視点を提供した。正敦は化政期全体を含む40年余り若年寄を務め、改革派諸侯の重鎮として定信の老中退休後も大きな影響力を保持した。外交分野では、周知のように、対欧・対露・対朝鮮などで定信が敷いた路線が、結局は幕末まで継承された。正敦は、その路線を定着した人物としてその名が取沙汰されている。また当時の文化行政を担った一人として、分野を問わない学問の庇護者として、さらに文人としても各方面から注目を集めているが、意外にも正敦自身について記した史料は、断片的なもの以外は乏しく、正敦を論じる文献も現在なお稀である。むしろ『観文禽譜』をはじめとする正敦の文化的方面の業績の細部から見えることが少ない。正敦自身についての理解は『観文禽譜』研究の上で必須であるから、『観文禽譜』研究から明らかになった事実も含め、その人物像について現在までに知りうるすべてを、序論をなす第1章に続く本論文の第2章で提示した。なお、正敦と『観文禽譜』に関する研究史については、第1章で概観した。第2章ではさらに、本研究の過程で明らかになった正敦の蝦夷地視察に関する知見を述べた。レザーノフ事件の後処理のために蝦夷地を視察した正敦は、蝦夷地を踏んだ唯一の若年寄であった。また、視察に関して、後述のような仙台漂民に関する新知見も得られた。

『観文禽譜』自体は出版されるに至らず、現在十指に満たない（多くは部分的な）写本が各地に残されているのみである。そのため一部の識者の目にしか触れることがなかった。しかも残念ながら、近年に至るまでわが国の博物図譜が衆目を集める機会が殆どなく、明治以降少数の鳥類学者が資料的価値を認めていたものの、筆者が本研究に着手した1990年当時は、本書そのものを対象とした研究は極めて乏しかった。当初はテキストクリティークも殆ど手つかずで、写本によって分量に倍ほどももの開きがあることも指摘されるに至っていない状況であった。その後、複数の研究者がこの問題の解明に着手し、成果があがっている。『観文禽譜』は正敦のいわばライフワークであるから、その成立史を正敦の伝記的事実と絡めて上述の第3章の冒頭で改めて述べた。この第3章は、現在の鳥類分類の視点から、『観文禽譜』の価値を検討することを主たる目的とする。その目的の達成のために、本論文では直接論じないものも含め、現代の鳥類学、あるいは動物相の変遷をたどる必要がある生物学諸分野に資するため、関連諸表を本論文の巻末に付した（付表3～6）。

一方、上述のように『観文禽譜』の価値は生物学的な基礎資料たる図鑑としての価値に尽きるものではない。定信の文人サークルの中心人物であった、学者・文人堀田正敦の足跡を記した第一級の資料として、文化史の広い方面からも研究されるべきものである。文学史・美術史などの立場から本書を再検討すれば、江戸を舞台とする（自然研究にとどまらない）学問の状況とその大恩人たる正敦の実像を解明する一助とすることもできる。本論文の第4章においては、『観文禽譜』及び著者正敦へのかかるアプローチを行った。『観文禽譜』は鳥類図鑑であるが、「総合的」と称される東洋的学問の伝統の中にあるものであるから、鳥の定量的データを分野別に細分化して扱う西洋の「科」学とは異なり、汎学問的な記述を特徴とする。しかし科学的な記載と他の学問的な営みとは

渾然として分離不能なのではなく、それらは合理的に区分されており、論ずるに困難はない。

批判的記述・記載を旨とする図鑑も、時代の影響を受ける、その産物である。しかし、本論文第5章では、むしろ図鑑を史料として、時代と社会を覗くことを試みた。この試みが成り立ったとすれば、それは『観文禽譜』が幕閣の — 全ての情報が集中する要にいた若年寄という — 中心人物によって、当代の一流の学者を動員して作られ、しかも、その隠れた意図の一つとして蝦夷地経営の資料を希求するという、西洋博物学推進の原動力となった植民地の「在庫目録」の作成と同じ動機が存するからである。すなわち、『観文禽譜』は、社会を一定の方向に導こうという権力の一面を明かす史料となった。仮に日本にも国家主導の西洋型の（フロンティアの自然物の発見と学問的整理を目的とする）探検博物学があったと主張するとき、それを明かすのは唯一『観文禽譜』のみであろう。薩摩藩にも、中山支配のために同じ動きがあったことが知られているが、蝦夷地においては、探検家たちと幕府の乖離のみが強調されてきたきらいがある。しかし、『観文禽譜』からは、蝦夷地の探検家たちの成果は幕閣まで伝わり、かつ無視されてはいなかったことが明らかになる。

なお、上述のように本論文巻末には、堀田正敦の年譜と著作等の目録（付表1、2）、『観文禽譜』収録の鳥類に関する生物学的・分類学的資料（付表3～6）、歌学書としての『観文禽譜』の規模と視野の大きさを示す資料（付表7、8）等の付表と、『観文禽譜』の史料としての側面を示す記述の抜粋（付属資料1～3）を付した。本論文でその内容の全てに直接触れてはいないが、いずれも『観文禽譜』の多面的価値を示すものとして、独自の意義を有している。付表3～6は、『江戸鳥類大図鑑』で行った同定作業を基に作成した。種・亜種の同定は、概ね西暦2000年頃までに提出され、大方が支持する説に従った。但し、本論文に反映したのは、全て筆者の最終的な見解である。

本論文の成果

本論文の総論にあたる第6章においては、第2章から第5章までで得られた主要な成果を簡潔にまとめて総括し、今後なすべき研究を展望した。これらは必ずしも本論の章立てに従って整理したものではないので、いずれの部分で主として論じたのかをそれぞれ記した。『観文禽譜』の価値と、その研究の意義、及び堀田正敦に対する研究の意義については本論文の序論で触れているのだが、もちろん筆者の現段階における研究成果がその全ての領域をカバーしているわけではない。総論では、何が得られて何が残されているかを検討し、これからの研究の道筋について考察した。また、この研究の現段階、すなわち、本論文において明らかにされていないことについては第1章でも予め述べたが、本章末で詳述した。なお、以下には、実質的に本論文の付属資料である『江戸鳥類大図鑑』において得られた成果も、本論文と不可分に連続するものが多いため、合わせて記してある。

1) 堀田正敦に関して

*これまで包括的に論じられたことのない堀田正敦自身の生涯に関して、その40余年にわたる若年寄在任期間の業績と文化的分野における成果を中心として明らかにした。第6代仙台藩主伊達宗村の庶子8男としての仙台における生誕から、晩年にまで言及するため、年譜を作成し(付表1)、極力統合的に人物像を提示した。これは『観文禽譜』から読み取ることができる正敦の鳥学研究の実情を理解するのに資するためである。まず断片的な史料の中に見える正敦の人物像を総合して提示し、定信の改革派諸侯の一員としての政治的活動を一瞥し、定信との政治的同士としての、和歌では互いに切磋琢磨する関係を論じた(第4章第3節)。正敦が学術の庇護者として、学者支配を任務の一つとする若年寄の責務を十分に果たし、また、自らも学芸の薫り高い浴恩園サロンを定信とともに指揮し、学者・文学者として業績を残したこと、そして『寛政重修諸家譜』、『干城録』、『厚生新編』など多数の大規模な徳川幕府の公的編纂物に中心的に関与し(付表2に現在知られている正敦の業績を提示した)、そこで得られたノウハウを注入し、諸学者の知見を投入して『観文禽譜』を完成させたことを示した。さらに、正敦は実兄の第7代仙台藩主重村ととくに懇意であったため、重村没後の仙台藩の困難な時期をよく後見し、藩に自らの業績の写しを送り続けていた。『観文禽譜』稿本仙台本も、かくして正敦没後も仙台藩で校訂が続けられたのである。

*また、特に津軽海峡を渡った徳川幕府唯一の若年寄として、レザーノフ事件の処理のため600名余の武装視察団を引き連れて蝦夷地視察(1807)に赴いたが、この視察の実情を正敦の『松前紀行』をもとに分析した。視察の際、仙台領に帰着した後の消息が明らかにされていなかった、いわゆる仙台漂民2名について、彼らを仙台領から箱館まで同行させ、旅の途上野辺地で自ら親しく尋問し、かつ箱館では、ロシア残留仙台漂民の援助を得て千島伝いにカムチャツカから帰国していた「南部漂民」と対面させ、それぞれから得られた情報をつき合わせていたことを明らかにした(以上第2章)。さらに、視察の際に得られた人脈から得られた蝦夷地の鳥の情報が、とくに『観文禽譜』の、我が国の北方の鳥に関する記述を他に例を見ないほど充実したものにしていることを示した(第5章第3節2)。また、改革派諸侯内で意見が分かれていたとされる蝦夷地の扱いについて、正敦が積極的開発論者であったことを推測した。

2) 『観文禽譜』を中心とする正敦の鳥学研究に関して

*鳥類図鑑としての『観文禽譜』を現代的な鳥類学の観点から精査し、記載の正確さを確認し、鳥相の変遷を追うことのできる資料として使用可能なものとした。その詳細のいちいちはこちらに要約することはできないが、さらに掲載鳥の種数、種の分析をおこない、学名を付し、生物学の枠内で使用可能な資料としての整理と位置づけを行い(『江戸鳥類大図鑑』及び第3章第4節)、また、科学的観点から、本書が江戸時代最大かつ最高度の記載文を持つ鳥類学(及び鳥学)の文献であること

を明確にした（第3章及び『江戸鳥類大図鑑』）。『観文禽譜』が収録する433種のうち、2000年現在日本産の鳥とされているのは323種であり、現在、日本鳥学会が認めている542種の60%にあたる。これは、観察技術と鳥の観察に当たる人の数を勘案すると、実に驚異的な数である。世界的に、一國で観察される鳥の数が急激煮に増えるのは、20世紀、とくに、その後半以降、バードウォッチングが一般に普及してからのことなのである。

*『本草綱目』の咀嚼作業と共に進歩を続けた当時の我が国の鳥学研究の様相を振り返り、リンネ、レーウイン、キュビエらの同時代の（「生物学」成立以前の）代表的な西洋博物学の成果との比較において、生物学的分類と記載の両面にわたり、それに引けをとらない水準に達していたことを示した。（第3章、とくに第2節及び第3節、第4章第1節）。さらに、これらを実証する資料として、付表3～6において『観文禽譜』が収録した鳥、および、しなかった鳥等を明らかにし、世界に先立って記載文を付した鳥が少ないことなどを示し、我が国の鳥類の分類学史的にかかわる研究に資する成果を得た。多くの場合、正敦がはじめて記載したと思われる鳥種でも、その断定は避けたが、『観文禽譜』制作の年代の前、同時代、後のいずれの時点で西洋分類学が当該種を記載したかを示し（付表4）、西洋博物学と江戸博物学の比較のための参考に供した。

*東洋的な「総合的」学問の伝統に即し、とくに『本草綱目』のスタイルを基本的には継承しながら、和歌を巧みに整理するなどした『観文禽譜』独特の記述の特徴を明らかにし（第3章第1、2節）、かつ網羅的な「鳥の歌学指南書」としての側面の価値を明らかにした（『江戸鳥類大図鑑』及び第4章第2節）。

*シーボルトらがもたらした西洋の鳥の剥製標本や図譜を正敦が論じ、我が国の鳥と比較同定しているアトリなどの記事からは、『観文禽譜』が図らずも東西博物学の接点を内包すること、しかし、我が国の博物学者たちは西洋博物学の方法論を知っていても使わなかったこと、その理由は本草綱目の体系が、鳥については必ずしも合理性を欠いているとはいえない水準にあったからであることが明らかになった（第4章第1節）。

3) 正敦に関する、とくに博物学史的な考察

正敦が、とくに齢を重ねるにつれ、本論文で分析した禽譜や、自らが手を染めた獣譜、介譜のほかに、正敦に近い学者を動員して、当時の植物を含む全生物相（および鉱物など）に対する博物学的体系を構築しようとしたことがうかがえる — その意志を明確に裏付ける資料は残念ながら見つからない — ことを強く示唆し、その状況証拠を示した。（第2章第3、4節、第3章第1節）。例えば、正敦子飼いの本草学者岩崎灌園は、禽譜には関与していないが、その主要な業績は結局、植物の分野に留まった。また、栗本丹洲の魚譜には正敦が序を付し、体裁が『観文禽譜』に類似し、あたかもこの体系に溶け込もうとしたように見えるものがある。体系構築に当たって、1) にあげ

た編纂物の総裁としての経験が活かされるはずであったが、その試みは結局、正敦の生存中は完成に至らず、正敦の実の甥、土井利位の『雪華図説』など若干の例を除いては、正敦の意志を受け継いで発展させる人物も結局はなかった。但し、『観文禽譜』は、正敦の没後も、その遺志を受けて仙台藩内の学者らの手によって、しばらくは校訂が継続されていた事実も示した（第3章第1章）。

4) 政権の中枢にいた人物が作った『観文禽譜』に対する史料としての観察から見える、化政期の幕閣とその周辺及び社会状況について

*大名らをも巻き込んだ、江戸の市井の鳥学研究の様相について、これまで言及されたことのない非身分的研究集団の存在とその鳥類学的水準など、東南アジアの鳥セイコウチョウが江戸で知られるようになった経緯や、ソウシチョウ、ズグロチャキンチョウ、仙台城で飼育していたマクジャクなどに関する『観文禽譜』の記事を例として、新たな一面を示した（とくに第5章第1節）。

*最上徳内ら蝦夷地の探検家の成果、また高橋景保らによるゴローヴニンの『日本幽囚記』の翻訳（オランダ語からの重訳）などが幕閣の中心人物の一人であった正敦によって深く読まれ、決して時折各方面から指摘されるようには無視あるいは軽視されてはいなかったことを明らかにした（第5章第1節）。シーボルト事件で獄死した景保の実名が『観文禽譜』においては消去されていないことは、景保と正敦の密接な関係を示す証拠として重要である。

*蝦夷地を日本のフロンティアと見たとき、その経済的利用・開発のベースとなる資料としての基礎的自然学、すなわち西洋博物学と同じ方向性を持った、探検博物学者らの情報収集者と記載博物学者の分業による博物研究が、正敦の周辺に成立していたとみることができることを示した（第5章、とくに第2節）。これは『本草綱目』の解釈を軸に、その薬学的価値の追求から発展したとされる我が国の博物学の姿とは明らかに異質のものである。

*学者支配を任務の一つとする若年寄たる正敦の周辺に集まった小野蘭山や栗本丹洲、大槻玄沢、桂川甫賢をはじめとする学者たちが、正敦の指示で各分野においてシステマティックに分業し、あたかも、外には開放されてはいない、正敦のみを学生とする一つの大学のような研究機関が成立していたかのような様相を呈していたことを明らかにした（第5章第2節）。そのほかに、文芸の方面では、松平定信と正敦らが中心となって運営した、浴恩園サロンの存在の大きさと、その政治集団としての意味（第4章第3節）、同時に、1)で述べた大規模編纂物制作の母体としての意味を明らかにした。また、このサロンにおける研鑽が、実に1367首もの鳥の歌を収録した「鳥の歌学書」としての『観文禽譜』の成立にも力あった事実も示した。また、学芸、学術的研究の遂行に当たって、定信の意向（寛政の改革の精神と、その支柱たる朱子学）との矛盾がないように正敦が特段の配慮をしていたことを観察した（第4章第3節）。

既述のように、本論文では、『観文禽譜』が引用する膨大な漢籍（『江戸鳥類大図鑑』p. 732-741参照）がもつ日本博物学史における意味の分析には着手していない。これは、江戸の本草学的博物学全体を俯瞰した、主要な漢籍の受容に関する十分な研究の存在という前提条件が、我が国の博物学史研究では、いまだ十分ではないことによる。しかし、江戸博物学の成果のうち、『観文禽譜』は大量の漢籍を明示的に引用し、内容に言及している。多領域の漢籍と江戸博物学との関係の研究には、むしろ『観文禽譜』が大きな手懸りを与えよう。

また、『観文禽譜』が掲載する鳥図は、正敦の蔵図以外に、諸大名・奥医師・絵師の蔵図の敷写しが多数を占めるが、これを担った絵師達はいまだ不明である。新史料の発掘が俟たれる。『観文禽譜』に対する美学史的研究にも、なお余地が大きい。これら2点がさらに研究されるべきだが、どちらも資料の検証と分析が難しく、時を要するであろう。

本論文中で度々述べたが、正敦は、意図して身を隠したと思われるほど、活躍に見合った記録がない。しかし本論文では『観文禽譜』と紀行文『松前紀行』の分析から、レザーノフ事件後の蝦夷地情報に関する新知見を得るという稀有な経験が得られた。これからして、いまだ史学的分析がなされていない、正敦の文集『水月文藻』や『続水月文藻』（国会図書館など蔵）、佐野市郷土博物館保管の正敦の数々の文章、そして本格的な分析が待たれる『観文獣譜』、『観文介譜』の研究が、江戸博物学の新たな到達点を明らかにし、同時に化政期研究に新断面を切り開くと想像できる。すなわち、これらの中には、『松前紀行』のように、記述の僅かな部分に重要な事実が埋もれているのである。正敦の文集の価値は、定信研究における『宇下人言』等にも等しい。そして『観文獣譜』や『観文介譜』の分析は、生物学的観点でも有益であろうし、『観文禽譜』同様の史学的副産物を生むに違いない。

論文審査結果の要旨

松平定信によって若年寄に起用された堀田正敦（1755-1832）は43年間の在職中に「観文禽譜」など、多くの博物書を残している。本論文は鳥類図鑑としては最大規模である「観文禽譜」が江戸時代において最も高度な内容をもつ鳥類学の文献であり、江戸博物学が西洋博物学と同等の発展段階にあったものであることを明らかにしている。

本論文は6章で構成されている。第1章・序論では本論文の目的、意義および構成を述べている。第2章では、堀田は定信が主宰する文人サロン「浴恩園」の人脈や堀田独自のネットワークを活かして多くの編纂事業を推進したことを解明している。特に、堀田の若年寄在任中に本草学・博物学関連書物の刊行が激増したことを含めて、日本の本草学的博物学の黄金期として「堀田正敦の時代」を定置したことは本論文の大きな成果の一つである。第3章では「観文禽譜」を科学的側面から検

討している。ここでは本書の構成、鳥類分類体系を明らかにしたうえで、リンネに始まる当時の西洋博物学との比較を通して、本鳥類図鑑が西洋鳥学に匹敵するものであることを明らかにした意義は大きい。第4章では「観文禽譜」に収録された和歌の分析、文人としての堀田の事跡の検討から、この図鑑を鳥類学の範囲を超えた広い学問史・文化史の中に位置づけている。特に、定信と堀田との関係から文政期文化の要となった文人サークルの実態を解明した点は高く評価できる。第5章では堀田自身による蝦夷地巡見の実態と博物学との関係等を解明している。蝦夷地に関する博物学情報をロシア漂流民や北方探検家などから収集し「観文禽譜」に反映させたとする著者の発見は貴重であり、これは堀田が政治と文化をまたいで活躍した文人政治家であったことを示す研究成果である。第6章・総論では主要な研究成果を総括し、いくつかの課題と今後の展望を述べている。

以上、本論文は堀田正敦による「観文禽譜」を博物学・分類学および歌学の観点から、豊富な文献・資料に基づいて検討し、江戸博物学は当時の西洋博物学と同等の段階にあったことを実証した優れた論文であり、高く評価できる。

本論文の内容は12本の学術論文として発表され、「観文禽譜」は詳細な解説をつけて「江戸鳥類大図鑑」(鈴木道男, 2006)として刊行されており、研究内容は広く認められている。

以上のことから、著者は自立して研究活動を行うのに必要な高度の研究能力と学識を有することが明らかである。よって、本論文は博士(国際文化)の学位論文として合格と認める。